

Well-beingの実現につなげる伝記教材の授業 —「やなせたかし—アンパンマンの勇気」(小5)を例に—

佐藤 洋一* 加藤 洋佑**

* 名誉教授

** 附属名古屋小学校

Biographical Materials Classes that to Connect with Realization of Well-being: Taking “YanaseTakashi — Anpanman’s Courage” (5th grade) as an Example

Yoichi SATO* and Yosuke KATO**

*Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Nagoya Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan

I. 資質・能力型教育は何をめざすのか

1. 資質・能力型教育と Well-being

2021年「ポストコロナ期における新たな学びの在り方」では、「一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せ(ウェルビーイング)の実現」を目指した「学習者主体の教育に転換」を軸とした方策が提示された(教育再生実行会議第十二次提言, 2021年6月3日)。資質・能力型にシフトアップした新学習指導要領のゴールの一つに、Well-beingの概念が新たに位置づけられたとみることができる(下線部は佐藤・加藤による、以下同じ。注1)。

一方、PISA2018調査結果では日本の学習者の今後の教育課題として「複数の多様な情報・テキストを比較し的確に読解」「示された観点や自らの課題意識から批判的に分析解釈、考察し評価」「論理的に効果や説得力、条件等を考慮し考えを論述(評価)」できる能力育成の必要性が鮮明になってきている(注2)。

しかし、管見の範囲では資質・能力型の教育との関係で Well-being の理念の実現につながる系統的な教育方法論や実践的な提案はほとんどみることができない。本稿は小学校5年国語科伝記教材の授業を例に、資質・能力を育成し Well-being の実現につなげるための教育方法・カリキュラム論への視点を論ずるものである。

2. Well-being (ウェルビーイング) 研究と教育

ウェルビーイングの研究が盛んになってきた理由には(1)現代社会は豊かな経済発展を遂げ、生存の問

題が主要なテーマではなくなりクオリティー・オブ・ライフがより重要に、(2)個人主義が加速し個人の幸福度とその質的価値が重要に、(3)有効で信頼できる研究の発展でウェルビーイングの研究が広く認識され確立してきた等の要因が指摘されている(注3)。ただ、認知的・感情的に何を・どのように・どう感じるかは議論があり「主観的ウェルビーイング=人生の満足度+高いポジティブ感情+低いネガティブ感情」という捉え方や、「PERMA」のPositive Emotion(ポジティブ感情)/Engagement(熱中, 没入)/Relationship(人間関係, 関係性)/Meaning(人生の意味や仕事の意義)/Achievement(達成)等の見方もある。

これ等がコンピテンシーに基づく教育改革の国際比較や研究紹介とともに、資質・能力教育観に影響を与えたのは「OECDが提唱するこれからの社会で必要な資質・能力」(Education2030 Learning Framework)である。Well-beingは「個人的・社会的により良く幸せに生きること」とされている(OECD Education2030 中間まとめ・日本語訳は2018年文科省)(注4)。

今後は、資質・能力の「三つの柱(評価規準)」である「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」といった資質・能力を確実に育む各教科等の本質的な教育を行い、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」(Well-being)にまで意識を向けさせた教育方法、各教科等を学ぶ意義・価値をいかした実践的な提案等が求められる(注5)。現代における真の幸せとは何か、自分が積極的にそれを定義し考え、行動していくような主体性(エージェンシー)を育んだり、価値観の異なる

他者と積極的に関わりつつ自分を振り返ることができる資質・能力を（学びの調整・メタ認知能力）育てていく必要がある。

Ⅱ. 伝記教材の特質と位置

1. 他者の発見から主体的な生き方の形成へ

いわゆる「伝記」は小学校中学年以降の児童生徒が喜んで読む「テキスト形式」の一つであり、現行の学習指導要領の小学校高学年でも「伝記を読み自分の生き方について考える」という項目が明示され、各社で教材化されてきている。小中学校の国語科教材としても、「マザー・テレサ」「宮澤賢治」「田中正造」「緒方洪庵」「手塚治虫」「伊能忠敬」「金子みすゞ」等を取り上げた伝記教材が数多くあった（道徳教材化の事例は略）。

しかしこれらの国語科教材は伝記の読み方や意義、テキスト形式論、批評の方法（習得・活用・探究）についての系統的な位置付けや評価観から提案・検証されてきているとは言えないのが実状である。伝記教材を活用することは、偉大な業績を残し人類の未来に貢献した人物だけでなく、身近な家族や無名の人物等の生き方の中に「人生の苦難に、勇氣と知恵をもってどう向き合ったか」「人生の転機にいかにか決断し自分の人生を切り開いていったか」等を、自分の立場から主体的・批評的（対話的）に読み解く方法を学び、こうした人々の生き方や判断・行動について「自分の考え」を形成し、今後の自らの生き方の創造と関連させて指導していくことが国語科の指導ポイントといえることができる。

こうした観点から、つまり国語科学習と資質・能力育成を Well-being との関わりからとらえ直すような伝記教材の授業・評価開発等が求められている（注6）。

2. 伝記教材は論理と文学の「複合型テキスト」

伝記（教材）というテキストは、事実をある立場から記した記録・論証の文体としての論理的な文章と、筆者独自の感性や認識による語りや描写としての文学的文章の2つの「テキスト形式」を併せもつ「活用・複合（探究）型のテキスト」と言うことができる。

いわゆる伝記（評伝・史伝・自伝等を含む）は記録者によって選択されたある特定の人物の生涯と評価を描くもので、以下のような特質がある（私見）。①出生から死までの記録が語られる、②生きた証・価値（歴史的・文化的・国家的、時代・制度的）の論証がなされる、③時系列や幾つの特徴的なエピソードの選択・構成、解釈（意味付け）で記述される、④選択された人物の業績や人柄・人間性等を記録・論証するもの（筆者による今日的な意義の提案と評価、論証）とみることができる。

さらに、⑤文体・構成の特徴は記録の文体としての

論理的な形式・構成をもち業績や人柄・人間性等についての「筆者の発見と認識、主張（メッセージ）」が筆者独自の文体で語られる（構成・語り・描写・エピソード選択と記述、象徴的イメージの活用、読者意識からの工夫と配慮等）（注6・7）。

Ⅲ. 「やなせたかしーアンパンマンの勇氣」（小5）

1. 教材の特質と概要―筆者・梯氏の書下ろし教材―

本伝記教材は、「アンパンマン」の作者として著名な漫画家のやなせたかしの人生について、かつてやなせと共に雑誌「詩とメルヘン」の編集を行っていた梯久美子が教科書教材として書き下ろした伝記教材である（2017年執筆）。元になっている作品は梯久美子著『勇氣の花がひらくとき』（フレーベル館2015年）である。教材化での単元名は「伝記を読んで自分の生き方について考えよう」、タイトルは「やなせたかしーアンパンマンの勇氣」（小学校5年伝記教材・光村図書、12月上旬5時間扱い）である。

過去の歴史的な偉人を扱った教材ではなく、また現代的な職業とも言える漫画家、アンパンマンの作者を取り上げていることから児童にとってなじみやすく、取り組みやすい教材である。やなせたかしの伝記（評伝）として出生から死、その業績と評価が描かれ（伝記のテキスト形式）、伝記教材を読む魅力、学び型を指導することができる。特に、やなせたかしの一生を通し「アンパンマンの勇氣」（＝本当の勇氣、本物の正義）とは何かを考えさせているという本教材独自の二重の魅力についても考えさせることができる。

児童は、特別な環境や突出した才能に恵まれていたわけではないやなせたかしが戦争や職業、大災害と向き合う様子を読み取り、解釈していく中で自らの生き方にも向き合うことになる。そして、自らの Well-being の実現につながる、レジリエンスやマインドセット、クリティカルシンキング等の考え方を多く見つけることができる教材とすることができる（注3・10）。

2. 生きる勇氣とアンパンマン誕生の秘密

伝記は多様な観点・立場から書き構成することが可能だが、筆者・梯久美子氏による教材化の特色を（見方・考え方）ここでは6つに整理して示すことにしたい。

（1）この教材は二重の構造を持つ伝記教材である。

一つはやなせたかしの出生から死へ、果たした偉大な業績を高学年向けに語っていること。二つ目は顔を食べさせ人を励ますヒーロー・アンパンマン誕生の秘密には孤独で悲しい生い立ちと戦争体験があったこと、「アンパンマンの勇氣」とは戦争体験を経て「正義とは何か」という問いを持ち続けたことからきていること。人を殺す＝戦争、人を生かすこと＝食べ物を分け与える行為との信念からきている。

（2）悲しみや苦しさ、孤独等も人生を豊かに生きる糧

となる、何があっても前を向き生きる勇氣（レジリエンス）の大切さ＝アンパンマンの「勇氣」の一つ。梯氏はやなせ氏の孤独な深い悲しみに満ちた生い立ち（父の死と母との別れ）、大切な人との死別（弟と妻）等に触れ、「人生を豊かにするのは、豊かな思い出だけではない。寂しかったことや悲しかったこと、苦しかったこともまた、生きていく力になることをやなせ先生の人生を通して」読者である子どもたちに感じてもらえたと語っている（作者の言葉161頁『指導書』光村図書）。以下は、教材本文のキーワードからのまとめである。

- (3) 「本当の勇氣」とは「正義を行い人を助けようとしたら自分も傷つく」、でもどうしても誰かを助けたいと言う覚悟、信念の大切さを教えてくれる。
- (4) 「本当のヒーロー」とは、東日本大震災の時の人々のように「悲しみを心にしまって、他の人のために一生けんめい働いている人」こそヒーローであるという見方・考え方の大切さを教えてくれる。
- (5) 常識や時代の価値観に翻弄されず、自分の感性と経験から「問いを持ち続ける」こと、クリティカルシンキングの大切さを教えてくれる（注10）。
- (6) 家族との別れや死別、戦争や大震災等のように予測できない、不条理な事態は誰にでもやってくる。好きなことを見つけやり続けること（グリット）、レジリエンスの大切さを教えてくれる。

IV. 伝記に学びよりよい生き方を考える（概要）

1. 単元名の設定 伝記に学び生き方を考える

2. 単元の目標と評価規準（基準）

- (1) 伝記を読む魅力と価値、解釈・批評する学習を通して自分のより良い生き方について考える。【習得1】
（伝記を読み解く楽しさ）【知識及び技能】
- (2) エピソードの選択・構成・内容から人物の生き方を正確に読み取ることができる。【習得2】
（伝記の読み方・方略の理解）【知識及び技能】
- (3) 複数の情報や当時の常識的な価値観を批判的に解釈し、自分の考えを持つことができる。【活用1】
（テキスト形式の解釈と評価）【思考力・判断力・表現力等】
- (4) 人物を選び生き方について情報を集め、協力して論理的な構成のスライドにまとめることができる。【活用2】（課題発見解決能力、情報活用能力、言語能力）【思考力・判断力・表現力等】
- (5) ①伝記の解釈・批評、論理的な構成のスライドの作成、②発表・交流を通して学んだことについての考えや課題を共有し、③改めて身近な人やこれまでの自分自身の生き方等を問い直し、④これからの自分自身の生き方や人と人とのつながり、価値観を再構築しようとすることができる。

【振り返り】（主体的・対話的な学びから「深い学び」へ）
【学びに向かう力、人間性等】

3. 学習過程と指導の実際—習得から活用・探究へ—

本実践では、テキスト・情報の「確かな読解から考えの形成・解釈、共有、批評・創造へ」との観点から、習得から活用・探究までの学習過程を構造的に構想した（注6・7）。学習段階は五段階で、「習得型学習1」は全教科の基盤となる言語能力を高める段階。「習得型学習2」は国語科固有の基本となる言語能力を高める段階。「活用型学習1」はパフォーマンス課題に対する考えを創造的・論理的に形成・論述する言語能力を高める段階。「活用型学習2」は形成・論述した考えを共有して考えを深化する言語能力を高める段階。最後に、学習を振り返り、学びを一般化する段階としての「まとめ・振り返り学習」を行い、学びの主体性の育成やメタ認知化を目指している。

なお、「学習指導要領解説『総則』」（2017年文科省）では「深い学び」形成のためには「習得・活用・探究という学びの過程で」「各教科の特質に応じた『見方・考え方』を働かす」ことが強調されている（76～77p）。

これは「学習指導要領解説『国語編』」（2017年文科省）でも同様であり、「学習内容の改善」（「第1章 国語科の改訂の趣旨及び要点」）①～⑤のなかで「習得・活用・探究という「③学習過程の明確化、『考えの形成』の重視」が明記されている」（9p）（注8）。

①習得型学習1〈導入〉（1時間）

導入は教材の特徴（テキスト内容・形式）と学習のポイント、教材の本質に関わる部分について興味を持たせる。伝記のモデルとなる人物が東日本大震災で多くの人に勇氣を与えたエピソードと、歌詞（アニメ、アンパンマンの主題歌）を紹介する。聞いたことがある曲の歌詞に哲学的な内容が含まれていることに気がついた子どもたちは「子ども向けアニメの作者」というイメージを離れ、なぜこのような歌詞をつけたのだろう、どのような人生を送ってきたのだろうと疑問を持つ。さらに、伝記にはモデルとなる人物の他に、伝記を書いた「筆者」がいることを指摘し、伝記では筆者がそのモデルとなった人のことをどう捉えているか、読者に何を伝えるか、立場や専門性、問題意識等で変わること知らせる。その上で、実際に教材文を読み心に残ったエピソードとその理由、自分の生き方について考えたこと、その他読んで考えたことについて感想を書く活動を行う（【資料1】開発学習シート①参照。児童に配布の際、学習シート中のポップ体の箇所は空白（以下同じ））。

②習得型学習2〈基礎〉（4時間）

第2時はまず「学び型シート」（【資料2】開発学習シート②参照）を使い、伝記のテキスト形式の特徴や伝記の学習の必要性、Well-beingとのつながりについて

で指導する。自作年表を活用し、やなせたかしが生きた時代背景と当時の社会常識等を確認する。なお、歴史学習が始まっていない小学校5年生のため戦争の構図や概念等に詳しくは触れず、敢えて主にやなせたかしの考える「正義」に関わる考え方を知らせる程度に留める（例、戦前：日本は西洋の国々の侵略からアジア全体を守るために正義の戦争をしている。国のために戦う（命をかける）ことは名誉なことであり、正義のヒーローだった時代。戦後：アメリカをはじめとした戦勝国が日本の侵略を止めた正義の国？。個人の幸せとは何か、本当の正義とは何か等を言葉にして考えてよい時代等）。

最後に、「構造と内容の把握」の学習としてエピソードとキーワードを確認しながら文章構成（テキスト形式のポイント）を捉えさせる（注8）。文章全体の内容と伝記の構成についても考えさせ、後の学習へつなげる（【資料3】開発学習シート③参照）。

第3時は「精査・解釈」の学習として、設定（少年時代・戦争）～なか2（本当の正義とは）までのエピソードから出来事（事実）と筆者が考えているやなせたかしの心情を読み取り、それらは作品「アンパンマン」の誕生にどう結びついているか解釈する学習を行う。この学習を通して、伝記のテキスト形式の特徴である記録の文体と、筆者の個性的な文体とを分けて読み取り、人物像やエピソードを解釈する力の育成を目指す（【資料4】開発学習シート④参照）。

第4時も「精査・解釈」の学習として、同じエピソード（アンパンマンが認められるまで、長い時間がかかったこと）が書かれた、複数の文章（注9の梯・中野両氏それぞれP101～115、P81～95を使用）から、自分自身の生き方に生かせそうな考えを探す学習を行う。教科書本文と同じ筆者がやなせさんについて書いた他の伝記と、別の筆者（中野晴行さん・編集者や漫画評論家として、やなせさんと関わったりインタビュー等をしてきたりした人）が書いた伝記の、同じエピソードを比べることで対比と解釈等批判的思考力を育成する。

また、話し合いの中で自分の生き方に生かせる観点として、粘り強く、逆境に耐え抜く力に関する意見が出てくることが予想される。その際には、その力はレジリエンスという考え方であることを指導し、やなせたかしの生き方で他にレジリエンスが表れているところを探し、グループで共有させる。

さらに、Well-beingの実現に向けて成長型マインドセットの構築も重要である。本授業ではやなせたかしは生前「自分は絵が下手だし、特別な才能はもってなかった」と話していたエピソードを取り上げる。これにより、生まれつきの能力（才能）で人生は決まるという考え方（＝固定型マインドセット（成長しにくい））に対して、才能ではなく、どのような生き方をしていくか、努力をするかで人生は変えられる、と

いう考え方（＝成長型マインドセット（成長しやすい））について価値付けし、Well-beingの実現につなげる（【資料5】開発学習シート⑤参照）。

第5時は、「精査・解釈」及び「考えの形成」の学習として、やなせたかしが東日本大震災で多くの被災者の方々が必死に生きる姿を見て考えたことは何だったのかを読み取ってきた人物像から考える学習を行う。また、そのような考え方は自分の生き方にどのように生かせるかを考えることでWell-beingの実現につなげる（【資料6】開発学習シート⑥参照）。

③活用型学習1（3時間）

第6・7時は習得型学習を生かし「日本の発展に関わった人の生き方から考える一私のWell-beingについて」スライドにまとめる。「題材の設定」「構成・表現形式の検討」「情報収集」「内容の検討」「考えの形成・記述」及び「推敲」の学習としての位置づけである。

1グループは四人を基本、スライドの構成と内容は、論理的な構成になるように以下のようにする。

○はじめ（1枚）・「設定」を書く（プリントを参考に）。

○なか1（1枚）・なか2（1枚）

- ・その人の「功績に関わるエピソード」を書く。
- ・必ず「グラフ」「表」「図」「写真」等の資料を使う。
- ・資料には説明＝キャプションをつける。
- ・失敗を乗り越えたエピソードがあるとなお良い。

○まとめ（1枚）

- ・「考察」として晩年とその人の功績をまとめる。

○むすび（人数分4枚）

- ・調べた人物の生き方から考えた自分のWell-beingを書く。一人1枚、全員が書く。

一人2枚のスライドを作ることになる。五人のグループができた場合は「なか」を増やすことで対応する。グループで活動させることで達成度や理解度の高い児童・低い児童もより短い時間で効率的に自分の考えを広げることが可能になる。

なお、スライドをグループで作る方法は様々ある（各学校で導入されている学習支援ソフトを利用する等）。例えば実践者の勤務校のようにグーグルアカウントが児童に割り振られている場合は「グーグルクラスルーム」を活用する方法がある。「クラスルーム」に、「日本の発展に関わった人」について調べ、『スライド』を用いて発表する」という課題をあげる。そしてグループで分担した部分をそれぞれがアップロードする形でスライドでスライドショーを協働で作り上げる（注10）。

上記のようなパフォーマンス課題に取り組むことができる学習環境を整えオンライン上で仲間と会話（Communication）し協働作業し（Collaboration）一つのスライド（プレゼンテーション）を制作・創造（Creativity）が可能になる。お互いの良さや工夫、改善点等を発見（Critical thinking）、話し合うこともで

きる活動となる（【資料7】開発学習シート⑦参照）。

④活用学習2（0.5時間）

第8時は「共有」の学習。グループでスライドを発表し互いの良さや工夫、改善点を共有、評価、交流する。

⑤まとめ・振り返り学習（0.5時間）

「考えの形成・深化」の学習。学んだことや課題を確認し、他教科への活用や自らの生き方、価値観等の面から学びを自覚する。学習したことや「むすび」に書いた自分の行動目標がどのように社会とつながっていくのか考え（価値付け、価値の創造）、まとめる。学んだことの生かし方について意識させたり、自分の興味・関心・立場から調べ価値付けさせたりしたい。この振り返りシートは同時に児童が自らの学習をメタ認知することができるためのルーブリックにもなっている点が重要な特徴である（【資料8】児童用振り返りシート【資料9】教師用ルーブリック参照）。

4. 学習評価開発—ルーブリック（教師用・児童用）—

「テキスト形式」による学びの深さや個性、汎用性を重視するためには、到達目標に対応した振り返りの新たな視点の再構築が必要となる。本実践では評価基準（ルーブリック）を8項目設定した（注11）。これらの項目を活用することで学んだことを新たな発想や認識・価値観、より良い生き方（Well-being）の形成に生かす方法を明示したり、指導者の指導及び評価に生かしたりすることができる（前述【資料8・9】参照）。

V. 考察

1. 資質・能力と多様なテキスト形式

伝記や随筆、批評・鑑賞、討論・議論（対話的学び）等21世紀型の新しい学びや資質・能力育成に対応すべき多様な教材ジャンル（テキスト形式・表現）や言語活動が、学習指導要領やPISA調査等で示されてきた。しかし、国語科での授業実践では、依然として教材研究や授業・評価開発等の面での混乱が多い。様々な背景と要因があるが、一端として次の点が挙げられるだろう。

一つは、国語科教育学に戦後以降根強く残る形式的な文章観による教材・指導観がある（文種別指導）。また、国語科教材研究論では依然として文学的文章と論理的文章の二大別が多く、両者の特性を併せもつ、また表や図やグラフ等、非言語情報を組み合わせたいわゆる「活用・複合（探究）型のテキスト形式」についての実践的研究、重要性への指摘が十分に行われていない。

二つ目としては、新学習指導要領「解説」でも「多様なテキスト形式」についての言及が漠然としたものになっており（例、鑑賞・評論・批評の相違、随筆・詩歌・物語創作と評価観）、結果的に各社の教科書・手引きや指導書等でも指導方法や学びの系統性・汎用性、評価観等の記述が明らかではないことが挙げられる。

2. 教科の本質とカリキュラム・マネジメント

教科・教材の本質や学ぶ価値（見方・考え方）に即した作品形式・構成・ジャンル（多様なテキスト形式）の位置づけと解明は国語科教育の実践に何をもたらすか。

以下、簡潔に私見を述べることにする。

①国語科学習の本質的な学びの意義と言語能力（言語活動）の系統性（例、報告・鑑賞・批評、随筆、詩歌等）の明確化ができる、②他教科・領域等での学びへの教科横断性・汎用性等の明確化ができる、③教材が変わっても既習の「テキスト形式」での学びを活かし、アニメ・映画・ドラマ、新聞・報道・ニュース、ブログ、情報形式等の授業構想、解釈と評価、日常生活での判断や考察等に活かすことができる（創造や批評性）、④習得型の基礎・基本のテキスト形式（構成）と活用・複合型テキストの関連性の整理で教室での学びを実生活や現代的情報リテラシーへの対応等が可能となる。

つまり、「多様なテキスト形式」を解明し授業実践に位置付けることは、学校全体のカリキュラム・マネジメントを具体化するためにも重要な視点となりうると思われる（注12）。

VI. 結論、今後の課題

本稿の冒頭で、日本の子どもたちを自立・自律した学習者にしていくための今後の教育課題として以下の項目を指摘した。1複数の多様な情報・テキストの読解と解釈、2問いや課題意識からのクリティカルシンキング、3批評・評価する力、4論理的に効果や説得力、条件等を考慮し考えを論述・創造する能力育成の必要性。

多様な情報や価値観が交錯する現代、自己や社会に関わる課題を自分事として捉え、多様なテキストや情報・他者を批評的創造的に解釈・批評し、協働的に粘り強くより良い解決方法を試行錯誤しながら探究し続ける資質・能力や態度・価値観の形成が求められている。これは言い換えると、「一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せ（Well-being）の実現」につなげる（つなげる）教育方法や教育課程、授業・カリキュラム開発等の必要性とも言うことができる。

本稿はこうした実践課題に対応し、資質・能力論の教育方法研究を、Well-being・伝記教材研究等に関する実践的な問題提起を行ったものである。今後の課題としては、以下のような諸点があげられる。(1)「学びの深さ」「真正さ」を見取る観点や基準の本質性・妥当性の担保、(2)それ等を子どもたち個々にどう自覚させていくか、(3)自立・自律した学修者に育てるための学習方略、学習シートの提示や活用の仕方等（個別最適化・協働的な学びとの関係）、(3)教科・教材を学ぶ価値や本質（「見方・考え方」）をどのように「働かす」ことで子どもたち自身のものになっていくか等である。

【資料 4】 開発学習シート④伝記
の二つのテキスト形式（記録の文
体と描写の文体）を意図的に読解
し、人物像やエピソードを解釈す
る力を育成する。

- 1 生い立ちや家族関係、深い寂しさ、戦争体験、弟の戦死等から「食べる」幸福・「真の正義」について読解・解釈し「考え」を持つ（精査・解釈）。
- 2 これ等の体験と強い想いが後に、作品「アンパンマン」の誕生にどう結びついているかを解釈する。

日記帳

年 月 日

書

出来事

「出来事」を「出来事」の欄に記入し、その出来事の内容を「出来事」の欄に記入する。

出来事

出来事の内容を「出来事」の欄に記入する。

日記帳

出来事の内容を「出来事」の欄に記入する。

出来事

出来事の内容を「出来事」の欄に記入する。

出来事

出来事の内容を「出来事」の欄に記入する。

日記帳

出来事の内容を「出来事」の欄に記入する。

【資料5】 開発学習シート⑤複数の類似した情報から、自分の生き方に生かす（Well-beingにつながる）観点を探す。

- 1 梯・中野両氏の伝記作品のエピソードを比べクリティカルシンキング（4C の一つ）を育成する。
- 2 粘り強く逆境に耐え抜く力（レジリエンス）や共感力、やり抜く力（グリット）等の重要性（＝成長型マインドセット）について価値付けし Well-being の実現につなげる。

伝記

①教科書「やなだて」の「やなだて」の巻頭語「やなだて」

②教科書「やなだて」の「やなだて」の巻頭語「やなだて」

山本 さんの伝記

山本 さんの伝記

山本 さんの伝記

中野 さんの伝記

中野 さんの伝記

中野 さんの伝記

伝記に關係するイラスト

【資料6】開発学習シート⑥読解・
解釈した人物像と筆者のメッセ-
ジを基に、自分の生き方・行動を
考える

- 1 やなせたかしが東日本大震災で多くの被災者の方々が必死に生きる姿を見て考えたことは何か、理由は。読み取ってきた人物像から考える（精査・解釈及び「考え」の形成）。
- 2 そのような考え方は、これからの自分の生き方にどう生かせるかを考える（自分にとってのWell-beingの実現につなげる）。

[illegible]

—140—

〈付 記〉

本稿の理論的な部分は、佐藤洋一による編著・論考等による（注記5～7）。実践は愛知教育大学附属名古屋小学校で加藤洋佑が行った（2022年11月, 11月14日公開授業）。誌面の関係で授業概要と開発シート等の一部を掲載した。児童の詳細な学びの実態と考察等については別項を期したい（佐藤はⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ, 付記, 注記・主要文献を執筆, 加藤は授業構想と実践, 学習シート開発, Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ, 資料1～9等を執筆した）。

〈注記・主要文献〉

- 1 国立教育政策研究所編集『PISA2015 年調査国際結果報告書 生徒のWell-being』（2017年）。
- 2 国立教育政策研究所編集『生きるための知識と技能7 OECD生徒の学習到達度調査（PISA）—2018年調査国際結果報告書』（明石書店2019年）。
- 3 マーティン・セリグマン著『ポジティブ心理学の挑戦』（ディスカヴァートゥエンティワン2014年）、内田由紀子著『これからの幸福について』（新曜社2020年）、渡邊淳司、ドミニク・チェン監修編著『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために』（BNN新社2020年）等。
- 4 白井俊著『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来』（ミネルヴァ書房2020年）、P・フィン他編・三宅監訳『21世紀スキル』（北大路書房2014年）等（詳細は略）。
- 5 佐藤洋一・加藤洋佑「創造的な『課題発見・解決能力』を育てる探究型国語科学習」（『名古屋学芸大学（教養・学際編）研究紀要』第16号2020年3月）、同「多様なテキストを批評しWell-beingの実現につなげる教育」（『同研究紀要』第18号2022年3月）。
- 6 佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型学力」開発と授業モデル4伝記・ノンフィクション編』（明治図書2011年）、同研究発表「批評的・創造的な学びの授業開発—テキスト形式に着目した21世紀型学習—」（第127回全国大学国語教育学会2014年11月）等。
- 7 佐藤洋一・左近妙子「『深い人間的な学び』を創造する伝記教材の授業」（愛知教育大学研究報告第66輯（教育科学編）2017年3月）。
- 8 本稿で使用している「構造と内容の把握」「精査・解釈」「題材の設定」「情報収集」「内容の検討」「構成・表現形式の検討」「内容の検討」等の「」表記は、「3〔思考力, 判断力, 表現力等〕の内容」における「指導事項」のキーワードである（11～39p, 「学習指導要領解説『国語編』」2017年文科省）。
- 9 梯久美子著『勇気の花がひらくとき』（フレーベル館2015年）、中野晴行著『やなせたかし』（あかね書房2016年）。『時代の証言者No.48 水木しげる・やなせ

たかし』（読売新聞社2005年）、『ユリイカ8月臨時増刊号—やなせたかし・アンパンマンの心』（青土社2013年）、やなせたかし著『わたしが正義について語るなら』（ポプラ社2013年）、同『やなせたかし おとうものごとたり』（フレーベル館2014年）等。

- 10 4Cとはアメリカ教育省・教育団体等の連携によって2002年に設立された非営利団体Partnership for 21st Century Learning（P21）により特定された21世紀に必要とされる4つのスキルである。定義には諸説あるが私見も含め概要をまとめる。

1クリティカルシンキング（Critical Thinking 批判的・論理的思考）：情報を熟考し、それを新たな文脈のなかで解釈し既存の知識に基づいて新たな問題への解決策を見いだす能力。「常識を疑う、問い・課題を持つ」「問題発見・解決能力」。2クリエイティビティ（Creativity 創造性）：新しくユニークなものに加え適切かつ有用で目の前の課題に適したコンテンツを創り出す能力。デザインシンキングにも通じる感性や発想を重視した新たな企画・提案能力。3コラボレーション（Collaboration 協働）：協働とはチームの目的を達成するためにチームの一員として他者とともに取り組むことのできる能力。自己の考えや提案を持ちつつ異質な他者との協働によって新たな発見・発想や提案を構想する力。4コミュニケーション（Communication 対話・意思疎通）：自分の考えを的確に他者に明確に効率的に伝えることができる能力、対話・聞く能力、議論を評価する力、共感・想像力も含めた人間関係構築能力とされている。

- 11 本稿における評価基準8項目の設定は、Ⅰ【知識・技能】を1・2とし、Ⅱ【思考・判断・表現】を3・4、Ⅲ【主体的に学習に取り組む態度】を5・6、Ⅳ【メタ認知】を7・8の項目に分け提示した。学習指導要領での資質・能力は「三つの柱」（ⅠⅡⅢ）で構成されているのでⅣ【メタ認知】7・8項目は不要と思われるかもしれないが、本来はⅠⅡⅢを構造的に包括するⅣの視点が必要であり、学習指導要領における評価観の課題を是正するとの考え方からである。

また、文科省による資質・能力「三つの柱」の「評価規準」はA～Cの3段階評価が示されているが、学びの「質」の在り方を具体的に見取り評価することが求められていること、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を評価し学習者のメタ学習につなげる支援をするためには3段階の評価規準でなくより詳細な基準が必要である。本稿では学習指導要領の評価観の課題への問題提起の意味もあり、「評価基準Ⅰ～Ⅳ」を0～5の5段階に設定した。

- 12 佐藤洋一・有田弘樹「資質・能力を育て『深い学び』につなげるカリキュラム・マネジメント」（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要12号2019年3月）。

（2022年9月26日受理）